
癒えぬ傷跡は、誰の中に・・・。

流星 ノル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

癒えぬ傷跡は、誰の中に・・・。

【Nコード】

N9210U

【作者名】

流星 ノル

【あらすじ】

この作品は前作「癒えぬ傷跡」の後編です。

初読の方はあまり楽しめません

寿命の女神となった刹那、運命の女神から遥華を助けたいかと言われ助けに行く事を決意する。
一方遥華のほうは刹那の弟、烈火^{れつか}に事実を聞かされ心が揺らぎ始めていた。

寿命の女神（前書き）

後編でございます。

バッドのようなハッピーエンドを目指して行きます。

だって、そうじゃないと「刹那」という存在を無駄にしていま
すので。

寿命の女神

カチャリ。

私は死んだ。

カチャリ。

私は・・・馬鹿なのだ。

カチャ。

あの日、私は弟の前で両親を殺した。

カチャ。

「・・・。」

結んでいた髪を下ろし

私の背中には大きな白い翼。

足に付いたリング。

結界、此処からは出られない。

私は、神になった。

寿命の神。

生き物の寿命を砂時計の時間にして作る。

無表情。

遥華はまだ捕まったままなのだろうか。

助けに行きたい。

でも

出られない。

このリングがそれを許さないから。

私、紅 刹那もとい砂流 落音は空をみる。

最も、神界に空なんて無くて、真っ暗なんだけど。

「落音さん、こんにちはー！」

二人の子供が入ってくる。

彼女達は神ではない。

これからなるものだ。

「あら、いらつしゃい
どうしたの？」

此処には何も無いのに」

あるのは、大きさと多さの全く違う砂時計だけなんだけど。

「頼まれて」

黒い猫耳の少女が言う。

「運命の女神が、貴女の様子を見てくるよう、言われたので
キョトンとした。

運命の女神が？

何故？

「そう、こう言えって言われたの

『少しだけリングをはずす。

だから私のところにいらつしゃい』って」

青い髪の少女が言う。

「・・・そう

いつ？」

少女は首にかけてあった懐中時計を見て

「今日の人間界で日が沈む頃なので・・・

もう三十分後ですね。」

「ふうん。

で、貴女達はこれからどうするの？」

「付いていきます。」

「・・・そう、ありがと

運命の女神の館。

本だらけ

この中に人々の運命が書き記されてるのね。

「いらつしゃい。

来てくれてありがとう、寿命の女神」

「招いてくれてありがとう、運命の女神。」

微笑みあう。

少女たちから見れば。冷たい火花が散ったのは、見えなかっただろう
「本件だけ話すわ。」

「親友を助けない？」

ビクリとなる。

「何故、そう思うの？」

女神は言った。

「何故、ですって？」

どうでもいいでしょう

そんな事。

・・・。

助けないの？

このままでいいと思う？」

なんだか運命の女神は必死だった。

「・・・。」

助けない。

だって、私のせいであの子を巻き込んでしまったから・・・！
罪滅ぼしさえ出来ないから・・・！

せめて・・・たすけてあげたい・・・」

言う。

女神を見ると、とても悲しい顔をしていた。

「・・・。」

落音。

いえ、刹那。」

「・・・。」

「リングをはずします。」

ただし、親友を助けるまでの期間です。

必ず絶対助けないさい！」

そう女神が言った瞬間

私の身体が光る

「・・・瞬間移動?!」
テレポート

そう、眩いてる時。

最後に女神の顔を見る

悲しい顔は、まだ消えてなかった。

真実さえも。

寒い。

暗い。

私は窓の外を見る。

ゲームでよくいる捕らわれの身のお姫様って
こんな気持ちでこんな風景を見てたのかな。
とか考えながら溜め息一つ。

さすがにこんな高い所からは逃げられないか。
暗い世界。

高いお城。

高い塔の最上階が、今私がいるところ。

右足に鎖が繋がれてるせいで逃げられないし。
逃げた所で、此処が何処だかわからないし。
それに、刹那さんも居ないし。

短かった髪も、これでもかって位に伸びた。

服も、憤怒自体の衣装なのか

白ただのワンピースになっていた。

涙なんてもう枯れた。

だって、もう刹那さんは死んでしまったから。

目の前で。

目を瞑れば、あの光景は繊細に浮かんで見える。

刹那さんは、刹那さんの弟さんに殺された。

「・・・っ」

なんで、私なんかを守って。

『親友だったからじゃない？』

頭に直接声が入る。

「・・・？」

振り返る。

私に良く似た女の子が、居た。

でも、薄暗い部屋にぼんやり白く光ってるようで
少したじろぐ。

「貴女は・・・？」

そう聴くしかなかった。

彼女は微笑んで、言った。

『貴女であって貴女でなく。

憤怒であって憤怒でなくて

全七罪の元凶

・・・。

まあ、簡単に原罪者とも呼んでくれると、嬉しいわ
元凶？

「つまり貴女が全部の罪を産んだ。

という事・・・？」

彼女・・・いや。

原罪者は頷く。

『そういうこと。

暴食と強欲、嫉妬はすべて色欲から現れた罪。

怠惰だって傲慢から現れた罪。

だから色欲と傲慢では普通の攻撃は通用しない。

貴女の親友も、傲慢には叶わなかったし、ね。』

・・・。

「色欲って、どう強いの？」

私は色欲の戦闘シーンを見ていない。

だから、少し気になる。

『色欲は色欲だから・・・。

ま、能力的には風。

弟君が男だったから簡単に取れたけど

貴女の親友ちゃんだったら

完璧に間違いなく犯されてたわね

「貴女も一緒に。」

ゾクツとした。

「ま、そこは感謝しときなさい
弟君にね。」

それ以外は恨んでいいわよ、彼のこと」

原罪者が城を見下す。

「私は知ってるの」

「彼が姉・・・貴女の親友ちゃんを恨んでる訳」

「・・・え？」

何故この人が・・・？

と思ったけどそれよりも

「それって・・・？」

聴きたそうな私の顔に

原罪者はフツと笑って

「聴きたいなら、本人に聞けばいいわ」

そう言って消えてしまった。

それと同時に、ドアが叩かれる。

「飯の時間。」

付いて来い」

今の話の中心人物、弟君登場。

御飯の時だけ鎖も外してくれるし。

たぶん

悪い人じゃない・・・と思う。

「恨んでる？」

ボソッと彼の口からそんな言葉がこぼれる。

「・・・え？」

私は聴き返す。

「姉さんを殺したこと

恨んでるかっつて」

長い長い廊下を歩く間

沈黙が続く。

私は、言った。

「はい、恨んでいます。

とても」

自分でもなんでこんな事を
つて、言ってから後悔。

「・・・そっか」

彼はそういつて扉を開いた。

「食事は自由に食べてくれ。

それが僕に出来る罪滅ぼしだから」

そう言つて部屋を出ようとする彼を、

私は呼び止めた

「待つて。」

彼は振り向く

私は続ける

「私、彼方が悪い人には見えない。

それに・・・

どうして、彼方は刹那さんを恨んでいたの？」

私の質問と言葉に、戸惑う彼。

俯いてから、言った

「一緒に、食べていいかい？」

話はその時に言うから」

「僕の名前は紅 烈火^{れつか}。

刹那の双子の弟だ」

もう知っているだろうと目で言われる。

私はそつと頷く。

彼・・・烈火さんは少し黙つてから

「姉さんは、母さん達を殺した。」

そういつた。

私は動けなくなった。

刹那さんは、両親が亡くなったのは不慮の事故だって言っていた。絶望を隠せない私に、彼は追い討ちをかける。

「殺し方は簡単。」

父さんをナイフで一突きしてから母さんと一緒に

釜戸に放り投げた。

そのあと、姉さんは笑ってたよ。

そして僕に言っただ。

「こいつは魔女だったの

魔女は火炙りの刑でしょ？」

ってね。

姉さん自身、絶望が大きかったと思う。

だって人を殺したんだ。

見つければ殺されるのは自分だって。

黒かった姉さんの髪は、その日から真っ白になってさ。

結局、最後まで黒い髪だった僕が母さん達を殺したって話になっ
てた」

烈火さんはそこまで喋って私の顔を見る。

付いて来れているか。

そういいたいらしい。

大体解ってきた。

刹那さんの髪が白い理由。

烈火さんが刹那さんを恨んでいる理由も。

「で、刹那さんを・・・」

殺した。

烈火さんは頷いて続ける

「唯殺すのはつまらないからな。

だからせめて姉さんが集めてた七つの罪集めてやろって思った
んだ」

「だから・・・なんだ」

だから烈火さんは七つの罪を・・・。

「で、なんだが・・・

こんな噂を耳にした」

「・・・噂？」

「ああ。

姉さんが、神になったってな」

・・・。

「・・・え、ええ？」

私はまでも動けなくなる

刹那さんが神さまになった？

「で、明日くらいにお前の事助けに来るとか何とか。

・・・。」

烈火さんが私をジッと見る

なにやら考えた後

ニヤリと笑っていった。

「ま、使えるかな。」

そういった。

そう言って取り出したのは六個すべての罪。

神に対抗するには、それが一番だろう。

でも。

どうして彼は私に向けて嫉妬のネックレスを私に向けて振ったのか

私は解らないまま

倒れこむ。

「う・・・ん？」

起き上がる。

首が痛い。

また電撃で気絶させられた。

運が悪いにも程がある。

今度は両手両足に鎖が付いてて

先におもりが付いてて動けそうに無い。
目をつむる。

何でだろう、一人だけって気がしない。

「おい」

あれ？おかしいな

此処には私だけだと思っのに。

「おいったら」

なんで声なんて聞こえるんだろう。

それに、この声、どこかで・・・。

「てめえ

おいっつつてんだ！

死んだふりすんなこええだろ！」

胸座をつかまれて目が覚める。

見たことある顔が目の前に居た。

人間の姿の彼に。

怒られてるのに嬉しさが胸に込みあがる

倒れこむように抱きつく

「トラさああんっ！」

「おいこらっ！

デカイ声出すなよ気付かれるぞ！」

口を塞がれモゴモゴする。

わーでも、トラさんだぁ・・・。

「ま、いざとなれば猫にもなれるし

こいつらもいるしな。」

そう言って後ろを指差すトラさん。

後ろを見ると五個の罪があった。

暴食、傲慢、嫉妬、怠惰、強欲。

トラさんが指を鳴らす。

・・・しずかに。

すると五個は一瞬に人の姿になった。

「これがこいつらの本当の姿。

罪つてのは元々は悪魔なんだ。

こいつらがその悪魔ってわけ」

なっというようにトラさんは彼女達に微笑む。

彼女達は深く御辞儀をしてから

言った

「憤怒様。

お久しゅうございます。

私暴食、貴女様のお力になれますよう、頑張つて……」

彼女が話そうとすると……

「憤怒さんっ！

いやぁ、毎回思っけんど

顔が変わらんなぁ！

不運なのも変わらんし……

いやぁ、べっぴんさんっていややわぁ」

え……？

顔が、変わらない？

「強欲、言葉を慎みなさい。

これはこれは憤怒殿。

お体の本人様は初対面ですが

私は嫉妬。

何度も電撃を浴びせてしまい。

なんとお詫びを致せばよいか……」

これは苦笑い。

「ちよつとお。

嫉妬話長すぎなんですけどぉー？

憤怒、久しぶりー

傲慢としてまた貴女と話せるっていいわねえ」

ちよつと、 ぽい 性格だなぁー。

「……怠惰。」

・・・ぽいぽい。

と、うんうんしていると罪たちで喧嘩が始まる

「ちよつと強欲！」

私が最初に喋ってるのになんでそう邪魔するの毎回毎回！」

「そんなの知らへんわ。」

暴食が仕切ろうとするから悪いんやー

私がリーダーなんやからな」

「ん？リーダーは私では無いのか？」

一番礼儀正しく、博識で美人のこの私嫉妬こそが

この五人の中で一番リーダーシップがあるだろう」

「ちよつとちよつとお。」

あなたこの前テスト国語と歴史現代社会と雑学だけ九十点代で他全部二十点代よね。

博識と美人の部分は間違ってるわよお

この傲慢様が一番の美人でしょ！？」

「・・・絶対に違う」「」

「なんですつてえ？」

もう、突っ込む気がない。

カチン。

そう音がした。

「え？」

見ると足についていた一つの鎖が外されてる。

鎖の先に、怠惰が居た。

「・・・何したの？」

私が聴くと

彼女はニヤリと一言

「ウォーター、カッター・・・」

ピューと怠惰の指先から水が流れる。

聴いた事がある。

水は水圧を利用して何でも切れるって。

そう、たとえそれがダイヤモンドでも。

「・・・飽きた。」

めんどくさい」

そういつてすぐに私の側に座る。

彼女はしばらく皆の喧嘩を見ていた

「仲、いいよね・・・」

そう呟く。

私は

「・・・確かに」

そう微笑んだ。

「・・・」

その反応に怠惰は悲しそうな顔をする。

「やっぱり、覚えてない」

「・・・え？」

フツと笑って彼女は話題を変えた。

「色欲は、元々仲間なんかじゃないの」

色欲の話題だった

居ないと思ったら、そうだったのか

「一緒に部屋になると誰でも構わず襲うし。

たとえ妹でも」

「え？妹？」

「・・・そう、だから。」

私は得にあいつが嫌い」

確信した。

妹なんだ。

「・・・憤怒はね。」

繰り返すんだ」

行き成り話題が戻る

「繰り返す・・・？」

「うん。」

七つが集まったあと、作られた世界を滅ぼして
私達をバラバラにする。

憤怒自身も・・・」

その先に聞いたことは、私にはとても恐ろしく思えた。
そうか、そうだったんだ。

先ほど五人が言っていた不可解な語源。

原罪者が言っていた

憤怒であって憤怒じゃなくて

私であって私じゃない。

その意味も、全部、全部のなぞが、解けた。
そっか。

最初から、この名前なんて・・・

「・・・きた。」

さっきまで黙っていたトラさんが猫の姿で来る。

「何が？」

そう言った時点で、解った。

烈火さん、だ。

見渡すと、誰もいなくなっていた。

ガチャン。

鍵が開く。

「・・・逃げようとしたか」

烈火さんは私の足の鎖を見た。

私は隠そうと思ったけど

もうばれてる。

ガチャガチャン。

残りの鎖が全部放される。

「・・・え？」

驚いていると

「降りるぞ。」

中央ホール。

姉さんが、来る」

刹那さんが・・・。

私は暗闇の廊下を、歩いた。

罪は赦されない。

「姉さんが来る」

烈火さんのその言葉から何分が経過しただろう。

ホールの後ろに飾られている黒い十字架。

そこに私は磔にされた。

烈火さんは黒いマントで身体を包んで意識を集中してる。

そりゃそうか。

姉が、刹那さんが、神様が此処を襲いに、私を助けにくるんだから。

キッツと。

扉の開く音がした。

瞬間移動を浴びせられ

私は大きな城の前に居た。

黒い、何か全体的に。

城の色も、世界も・・・空も。

「刹那ーーーー！！」

聴いた事がある声に振り向く。

彼は私を見て若干驚いていた。

「あら、トラ・・・」

いや、今はこう呼ぶべきかしら？

契約専門の名の高い誇り高い悪魔、トラマルシア・アラリル」

「・・・マジか。

そこまで知り尽くしたってのかよ」

ゲツとした顔で少し後を引かれる

私はふっと笑っていった。

「安心して、貴女は無駄に魂を食いすぎたんだから
まだまだ死ねないわよ

寿命の神の私が言うんだから間違いないわよ」

えーとした顔で睨まれる

それから二人で笑いあって同時に城を睨んだ。

「さて、この中に遥華がいるのよね」

「ああ、監視してたが

如何わしい真似は一切してねえよ、あの小僧。

唯、人質に取られてるってのは悪状況だよなあ」

「いえ、こっちとしては好都合よ」

「は？何言って・・・」

トラの言葉に耳を傾けずに、私は扉を開いた。

「刹那さんっ！！！」

髪を下ろしているし、服装も違う。

だけど、あの白髪は・・・

あの目は・・・

間違いなく、私の親友の・・・

精一杯叫んだのに

涙と、笑みで声が震える。

私のその反応に刹那さんは私に微笑んだ。

そう、この笑みは・・・

初めて助けてもらった時と同じ月のような優しい笑みだ。

ああ、会えた。

ボロボロと涙が流れる。

「神になったって噂は本当みたいだね。

姉さん」

私は溜め息を付く。

そんな噂。

誰が広めたのか・・・

「寿命の神よ

私が望めば、彼方は今すぐにでも死ぬわ

烈火」

ギリッ

烈火が歯を噛んだ気がした

「いつもそうだ。

姉さんはその気が無いのにそう僕を脅して全部取ってくんだ。

あの時だって・・・っ！

この事言ったらあんたも殺すって言っておいて

友達に比べたらお前は僕の短剣を取って外国に逃げた・・・

っ！

何より臆病なのは姉さんだったんじゃないか！」

溜め息がこぼれる。

何回目だろうか。

「・・・確かにね。

臆病者は確かに私のほう。

取り返しにしては・・・私から何もかも取りすぎでしょう

抵抗さえしなければ

彼方は殺さない」

生きてた頃は

死ぬ事が怖かった。

一歩間違ったら終わりなんだって。

でも。

もう死んでるから

怖くない。

感じない。

そんなに変わってしまったのか。

自分のことが怖くなる。

でも、親友を守る為なら、私は・・・

「う・・・うあああああああああつああ!!!」

そんな叫び声と一緒に烈火が剣を振り回す。

私はひよいひよい避けながらささやく

「烈火・・・

悪い事は自分の寿命を縮めるの

どうしてそこまで命を大事にしないの。

どうしても死にたいのなら・・・」

クルッと回って烈火の左胸に手を当てる

「今この瞬間に彼方の心臓を止めてあげてもいいのだけど」

そんな言葉を、無表情で言う。

烈火は膝から崩れる。

恐怖が顔に表れすぎ。

「さて・・・

遥華、ただいま」

私が微笑むと十字架が消えて遥華がふわりと降りてきた。

「刹那さ・・・あつ！」

ドン

と遥華が跳ねる。

ゆらりと遥華が体制を立て直す。

「・・・」

様子が・・・変。

「遥・・・華？」

遥華・・・いや、遥華に取り付いたソレは言った。

「罪が暴走シマシタ。

これ以上暴走スル前に全部ノ罪ヲバラバラニします」

その言葉に

六つの罪はまた何処かに飛び去ってしまった。

「憤怒・・・？」

そうか、遥華は七つ目の罪、憤怒だっけ。
六つを見送った後

彼女は溜め息をついて私に微笑んだ。

憤怒じゃなく、遥華でもない、その声で。

「どうも

親友さん？」

親友さん。

その言葉が頭に響く

この声・・・何処かで。

烈火も同じ顔をしている。

「私は原罪。

七つの罪を創りし者。

憤怒にして憤怒でない者

そうね。

憤怒でいえば。

刹那の親友であり

彼方達双子の母であつたわ」

二人で顔を見合わせる。

そうだ。

母だ。

この声は、私が殺した母そのものだった。

でも、動いたのは、烈火だった。

「母さんは・・・！」

死んだんだ・・・っ！」

烈火は走って母の声を出している人物の胸座をつかむ。

「母さんが憤怒だったって?！」

そんなの知るか！

じゃあ、じゃあ僕達が・・・」

あれ？

おかしい。

おかしいな。

おかしい部分があるよ？

「母は憤怒。

遥華も憤怒。

母が死んだ時、遥華はもう産まれてたはずなのよ

どうして・・・」

私の言葉を聴いて

ソレは笑った。

「アハハ。

馬鹿ねえ。

他の六つは人に取り付くのよ。

アクセサリーとしてね！

でもね、憤怒は人自身が罪なの。

だから、自分の年齢を変えるのは当たり前なの。

だから、この世に彼方達の母も、翡翠 遥華という人物も最初か

らない！

刹那に殺されたから刹那と同じ年齢の子供に成りすましたの。

憤怒は歴代で記憶が作れるから楽だったわ」

高い笑い声と一緒に

遥華が倒れる。

「ねえ、聴いた、わよ・・・ね」

烈火に聴く

「ああ。

母さんが・・・憤怒。

僕達が七つの罪を集めたのは・・・偶然じゃなかったって事・・・

か」

ということとは。

私に殺され復讐しようと母・・・いや憤怒は遥華という架空の少女

いや、架空じゃなくて虚像の人物になる。

もちろん遥華に自覚はない。

私が日本に帰ってくる。

烈火がそれに気付く。

私は必然的に遥華を助け、必然的に親友にまでなる。

そして・・・烈火に私を殺させ

私が遥華を助けに来る。

そういうシナリオでこの世界は動いていたのか。

「う・・・ん・・・？」

遥華が目を覚ます。

何も覚えてないみたいであつた。

友情の刹那（前書き）

まず、一人目。

友情の刹那

「う．．．ん．．．？」

どうしたの？二人とも．．．」

目が覚めると、刹那さんと烈火さんが同じ顔で私を見ていた。
まるで

「こいつは本物か」って疑ってるように．．．

「もうっ！」

何なの？

私の顔に何か付いてる？」

顔を覆う私を見て

刹那さんが笑う。

「ふふ。

確かに付いてるわね。

目が真っ赤。

どれだけ泣いたの」

「にやつ」

ぐさっ。

烈火さんにまで

「確かにこれじゃ赤パンダだ」

「にやにやにやつ」

ぐさぐさぐさっ！

「ひ．．．酷いじゃんか！

こんな言われ方ないよお．．．！

しかもなんでさっきまで険悪だったのに意気投合してるの．．．

！」

私の言葉に二人は互いを見た。

「「確かに」」

と、口をそろえていった。

結局。

二人の関係は丸く収まった。

遥華も憤怒の最後は知ってるからって

何処かに言っってしまった。

「さて、遥華を助けるだけの約束だったし。

帰ろっかな」

背伸びをした。

ジーンツと頭がぼやっとした。

歌が、聞こえる

く見える見えるは儚い夢

遠くに見えるは昔の記憶

優しくしてくれた親友と

自分の不幸を呪いたい

たとえ世界を敵に回しても

私は犠牲を増やすだけ

復讐したいのに良心が邪魔をする

戦争に私は使われたの、痛むまで

全部、全部否定しよう。

歌を歌って、全部。全部く

親友。

親友って、なんだっけ。

あなたは誰？

行かなきゃ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9210u/>

癒えぬ傷跡は、誰の中に・・・。

2011年10月8日20時27分発行